千葉商大紀要　第58巻　第3号（2021年3月）pp. 133-144

〔論　説〕

源氏物語と古事記神話（五）

杉浦一雄

目次

十六　天下の統治
十七　国譲り
十八　まとめ
結び――「真木柱」という巻名の由来
第一項「真木柱」という巻名
第二項「寄りゐたまふ」柱
第三項「刺し挟む」という行為

十六　天下の統治

⑩男主人公がどちらも天下を統治する立場にあった点。

『源氏物語』によれば、玉鬘を奪い去った鬚黒大将はその後つぎつぎと出世を重ね、「右大将」から「左大将」（「若菜上」の巻、三七頁）（1）、さらに今上帝が即位されるや「右大臣」（「若菜下」の巻、一六五頁）に昇進して政務をお執りになり、ついには「太政大臣」（「紅梅」の巻、三九頁）の地位にまで昇りつめているのである。

「太政大臣」について辞書類は次のように記している。

太政官の長官。左右大臣の上に居る。定まれる職掌とては無く、天皇の御師範となり、四海に儀表たる人にして、最も重任たり。

（北山谿太『源氏物語辭典』）（2）

律令制で太政官の最高の官。

（『國史大辭典』第九巻）（3）

律令官僚機構の頂点に位置する太政官の筆頭長官である（太政官の長官は太政大臣と左右大臣の三名）。

（『日本史大事典』第四巻）（4）

律令制において国政の最高機関である太政官の首席の大臣。「だじょうだいじん」ともいう。定員は一名で、一品・正従一位相当。適任者がなければ欠員でもよく、則闕の官と称された。（中略）基経のときには職掌をめぐる議論がなされ、令文の本意は太政官の首班として国政を統括する地位とされた。当初は関白と密接にかかわるものであったが、一〇世紀以降名誉職的になった。

（『日本歴史大事典』二）（5）

すなわち、「太政大臣」とは「律令官僚機構の頂点」に位置し、「国政の最高機関である太政官の主席の大臣」であり、「国政を統括する地位」にある「太政官の最高の官」をいうのである。「定まれる職掌とては無」いにもかかわらず、「最も重任」であったといい、定員は一名だが欠員でもよいため

「則闕の官」とも称され、一〇世紀以降は名誉職的な地位になったという。

鬚黒はついに「太政大臣」の地位にまで昇りつめ、人臣を極めたのである。

鬚黒が「太政大臣」の地位にまで至り、人臣を極めるという『源氏物語』の物語展開には、少なからず『古事記』神話が影響しているように思われる。

『古事記』の神話によれば、大穴牟遅神を追って黄泉ひら坂までやってきた須佐之男命は、はるかかなたへ逃げ去ろうとする大穴牟遅神にむかって次のように呼びかけている。

「……おれ、大国主神と為り……」

（『古事記』〈新編日本古典文学全集〉）（6）

〔現代語訳〕「……きさまは大国主神となり……」

大穴牟遅神は須佐之男命から「大国主神」となるよう強く命じられているのである。

「大国主神」について、諸注は次のように記している。

名義は、天下を伏へて、宇志波久神と云意なり、

（本居宣長『古事記伝』）（7）

此の国土を平定してこれを統治し給ふ神と云ふ意……

（植松安・大塚龍夫『古事記全釋』）（8）

大は美称、国を支配する神。政治的立場からの神名。

（倉野憲司校注「古事記」〈日本古典文学大系〉）（9）

「大」は讃称の語。「国主」は国土を支配する魂の所有者の義。

（尾崎暢殃『古事記全講』）（10）

偉大なる国の主宰神の意。出雲によって代表される葦原中国の支配する神として現われている。後出別名の出雲の神々を統合して、後代の政治的な立場から命名された神。

（荻原浅男校注・訳「古事記」〈日本古典文学全集〉）（11）

偉大な、国の首長。記はこの名を五つの名をもつ「大穴牟遅神」が国作りをしたことによって最終的に獲得した最高の名としている。「偉大な、国土の君主」という名で、この業績と美名のために、天孫降臨にあたって国土を譲らされる運命となる。

（『日本書紀』〈新編日本古典文学全集〉）（12）

偉大な、国の主の意。国（地上の世界）の統括者をいう。後に続く物語が示すように、大国主としてのこの神が、葦原中国を完成した。

（『古事記』〈新編日本古典文学全集〉）（13）

要するに、「大国主神」とは偉大なる国土の主宰神ということで、この地上におけるもっとも偉大な神という意味である。大穴牟遅神は須勢理毘売とともに現世へもどって、地上におけるもっとも偉大な国土のあるじとなれと須佐之男命に命じられているのである。

このことは、玉鬘と結ばれた鬚黒がついに「太政大臣」の

地位にまで昇りつめたことと同等なのではなかろうか。

つまり、『源氏物語』において鬚黒が「太政大臣」となり全盛をむかえるという物語展開には、『古事記』において須佐之男命が発した命令が大きく作用していたということができるのである。

もちろん、結果的に鬚黒を「太政大臣」の座につかせるにあたっては、そうなるべきさまざまな設定があらかじめ施されていたのは言うまでもあるまい。

たとえば、右大臣の子として生をうけ、光源氏や内大臣（昔の頭中将）に次いで冷泉帝からの信望があつく次代の権勢家として嘱望され、実妹である承香殿女御が朱雀院の女御となって春宮を生んだため、四年後、冷泉帝が譲位するにおよんで今上帝の治世となるや今上帝の伯父にあたる唯一の外戚となって、「太政大臣」の座へと駆けのぼるなどなど。

こうした設定の背後には『古事記』神話において大穴牟遅神が「大国主神」となれと言挙げされたことが踏まえられていると考えられるのである。

十七　国譲り

⑪男主人公がどちらも短時日のうちに天下の統治から退いている点。

こうして鬚黒はついに「太政大臣」の地位にまで昇りつめることとなったのだが、それにもかかわらずまたたくまに亡くなってしまったため、太政大臣の座をすぐにも明け渡すことになってしまったというのである。

『源氏物語』〈第三部〉の「竹河」の巻には次のように記されている。

尚侍の御腹に、故殿の御子は男三人、女二人なおはしけるを、さまざまにかしづきたてむことを思しおきてて、年月の過ぐるも心もとながりたまひしほどに、あへなく亡せたまひにしかば、夢のやうにて、いつしかと急ぎ思しし御宮仕もおこたりぬ。

（『源氏物語』「竹河」の巻、五九－六〇頁）

〔現代語訳〕尚侍の御腹に、故殿の御子は男三人、女二人がいらっしゃったのだが、その方たちを、それぞれたいせつに育てあげようとお心がけになって、年月のたつのももどかしく思っておられるうちに、殿はあっけなくお亡くなりになったので、あとに残された尚侍の君は夢のような心地になられて、早く早くとそのご用意をととのえていらっしゃった姫君のご入内のこともそれなりになってしまった。

ここにいう「尚侍」とは玉鬘のことであり、「故殿」とは亡き鬚黒のことである。

鬚黒があっけなく亡くなってしまったので、あとに残された玉鬘は夢のような心地になり、ととのえていた姫君ご入内の準備もそのままになってしまったというのである。

じっさいに、鬚黒がいつ「太政大臣」の任を拝命し、いつ没してしまったのかについては正確な時期を明らかにすることはできないが、鬚黒は「太政大臣」という異数の地位にまで昇りつめながらもあっけなく没してしまい、その座をすぐにも明け渡してしまったというのだ。

こうした鬚黒の最高権力者としての短さについても、やはり大国主神について記す『古事記』の神話が大きく関与しているように思われる。それというのも実は、大国主神もまた

国土を支配する最高権力者となりながらも、短時日のうちに追い払われる結果となってしまったからである。

大穴牟遅神が「大国主神」となって、日本の国家の運営を任され国作りに邁進していた矢先、出雲国の伊耶佐の浜に天照大御神の使者として建御雷神が降り立ち、「この葦原中国は天つ神の子孫が支配する国である。お前の心はどうか」と尋ね、大国主神に「国譲り」をせまったのである。

これに対して、大国主神はみずからは何も答えず、後継者である八重事代主神に答えさせる。すると、八重事代主神は受諾の意向を伝えた。ところが、大国主神のもう一人の重要な息子である建御名方神が千引の石を差しあげながら登場し、力くらべを要求。しかし建御名方神は、建御雷神の霊威と怪力に負けて信濃国まで逃げ去ることとなった。

こうして、再び出雲に立ちもどった建御雷神はあらためて大国主神に意向を問いただし、正式に天照大御神に服属するむねを承諾、ここに晴れて「国譲り」がかなったのである。

大国主神にはほかにも多くの男子があるものの、後継として重要と判断されていたのは、「八重言代主神」と「建御名方神」という二柱の神である。

『源氏物語』では鬚黒には元の北の方との間に「真木柱の姫君」を頭に男の子が二人おり、「正妻」となった玉鬘とのあいだにも立てつづけに男子が誕生している。

つまり、鬚黒にもまた大国主神と同じように、後継者となるべき男子が複数いたことがわかるのである。

大国主神は誓っていう。

僕が子等二はしらの神が白す随に、僕は、違はじ。此の葦原中国は、命の随に既に献らむ。

（『古事記』〈新編日本文学全集〉、一一一頁）

〔現代語訳〕私の子ども二柱の神が申すことに従い、私は背きません。この葦原中国は、仰せのままにすっかり献上いたしましょう。

こうして大国主神は、「国譲り」を承諾し、出雲に立派な殿舎を建てて鎮座したというのだ。

もちろん、死ぬことと鎮座することとでは意味が異なるであろう。しかし、これまで国土の主宰神としてふるまってきた大国主神が「国譲り」を受け入れ、服属したうえで、それまでの権力を行使できなくなるということは死と同等の価値があるととらえることもできよう。

地上の支配者である大国主神が「国譲り」によってたちまちのうちに支配権を奪われ、鎮座したという『古事記』の記述は、「太政大臣」の地位にまで昇りつめたにもかかわらずまたたくまに没してしまったという鬚黒の物語の原点だったのではなかろうか。

すなわち、『源氏物語』のなかで、鬚黒が臣下として最高の位である太政大臣に就任したことも、また、せっかく太政大臣の地位に就任したにもかかわらずあっけなく没してしまったことも、すべて『古事記』における大国主神の神話を踏まえたうえで構想されていたということができるのである。

十八　まとめ

以上、『源氏物語』〈玉鬘十帖〉の掉尾を飾る「真木柱」の巻を中心に『古事記』上巻の大国主神をめぐる神話との比較をこころみてきた。

あらためて『源氏物語』と『古事記』神話との共通点をまとめてみよう。

①女主人公とその父親との親子関係にどちらも疑念を有する点。
②男主人公がどちらも武器とかかわりを有する点。
③男主人公がどちらも特異な容姿容貌を有する点。
④男主人公がどちらにもすでに正妻がいる点。
⑤男主人公がどちらも火難に遭遇している点。
⑥男主人公の妻が、男主人公のもとをみずから訣別している点。
⑦男主人公がどちらも女主人公を掠奪している点。
⑧重要な小道具としてどちらにも「琴」が登場している点。
⑨女主人公がどちらも「正妻」となっている点。
⑩男主人公がどちらも天下を統治する立場にあった点。
⑪男主人公がどちらも短時日のうちに天下の統治から退いている点。

これらによれば、『源氏物語』における「真木柱」を中心とする〈玉鬘求婚譚〉の源泉が『古事記』上巻の日本神話にあったことが理解されてくるはずである。

『古事記』の神話は、物語の主要な展開だけでなく、玉鬘や鬚黒大将さらには鬚黒の元の北の方や真木柱の姫君といった人物たちの人物造型にも大きく影響していたことがわかる。

須佐之男命　↓　光源氏
須勢理毘売　↓　玉鬘
大穴牟遅神（大国主神）↓　鬚黒大将
稲羽の八上比売　↓　元の北の方
木俣神または御井神　↓　真木柱の姫君

光源氏は須佐之男命をモデルとし、鬚黒大将は大穴牟遅神（大国主神）、玉鬘はその妻となった須勢理毘売をもとに人物造型されているのである。

求婚に関しては、もともと大穴牟遅神（大国主神）と須勢理毘売二人だけの問題だったものを世間へと広げ、競争相手を付加することによって〈玉鬘求婚譚〉を形成することになったと考えることができよう。

鬚黒が玉鬘を自邸へと連れ出す突然の行動には、大穴牟遅神（大国主神）が須勢理毘売を連れ出して須佐之男命のもとを逃げ去るという『古事記』の神話がもとになっていたと考えるべきであろう。この結末は、『竹取』や『宇津保』などではなく、明らかに『古事記』の神話を踏まえていたということができるのである。

太政大臣であった鬚黒が突然亡くなったのち、世間の風向きがまったく変わってしまったために何かと苦労する鬚黒家の実情については、『源氏物語』〈第三部〉「竹河」の巻へと記述がつづいているといえよう。

すなわち、『源氏物語』「真木柱」の巻は『古事記』における大穴牟遅神（大国主神）の神話を源泉として成立したと結論することができるのである。

結び――「真木柱」という巻名の由来

第一項「真木柱」という巻名

⑫巻名「真木柱」にちなみ、どちらも柱に「刺し挟む」ことで共通している点。

しかしながら、『源氏物語』が『古事記』の神話を踏まえて造型されていたということは、物語の展開や人物造型だけに限ったことではない。「真木柱」という巻名そのものの由来についても『古事記』神話からの影響をみとめることができるのではなかろうか。

そもそも『源氏物語』の巻名について、一条兼良は『花鳥余情』のなかで次のように述べている。

凡五十四帖の巻の名に四の意あり一には詞をとり二には歌をとる三には詞と哥との二をとる四には歌も詞にもなきことを名にせり

（伊井春樹編『花鳥餘情』〈源氏物語古注集成〉）（14）

つまり、これらをまとめてみると、一条兼良は『源氏物語』五十四帖の巻名を、

①詞からとったもの
②歌からとったもの
③歌と詞の両方からとったもの
④歌にも詞にもよらないもの

の四つに分類し、「真木柱」の巻名については②「歌からとったもの」としているのである。

巻名の由来となった歌は次の歌である。

今はとて宿離れぬとも馴れきつる真木の柱はわれを忘るな

（『源氏物語』「真木柱」の巻　三七三頁）

〔現代語訳〕今はとて……（今はかぎりと、このお邸を離れていってしまっても、これまでなれ親しんできたこの真木の柱は、私を忘れないでおくれ）

このときの姫君は、この場面から作者によって「真木柱離れがたくしたまひし君」（「紅梅」の巻、三九頁）「真木柱の姫君」（「若菜下」の巻、一五九頁。「竹河」の巻、八九頁）あるいは単に「真木柱」（「竹河」の巻、六五頁）と呼称されるにいたっている。作者にとってもきわめて印象的な場面だったのである。

鬚黒大将が玉鬘に夢中になり、北の方をないがしろにするのをにがにがしく思っていた式部卿宮は、娘である北の方とその子どもたちを不憫に思って実家へと引き取る決心をする。北の方は父が差し向けたむかえを受け入れ、幼い男君たちを集めて観念する。

ところが、このとき姫君だけは父である鬚黒大将にたいそうかわいがられてきたためもあってか、とてもこのまますぐに立ち去ることができない。せめてもう一度逢っていとま乞いなどを申しあげてからと父の帰りを待ちつづけていた。しかし、日も暮れようとし、雪も降ってきそうな空模様になったにもかかわらず、一向に父が帰ってくる気配がない。姫君は母親に急かされ、諦めるようにうながされたうえで、馴れ親しんだ家を去るにあたって一首の歌を詠みあげた。それがこの歌なのである。

歌にいう「真木の柱」とは「檜や杉の柱」（15）のことで、

「立派な建築用の材木」（16）をいい、「真木の柱はわれを忘るな」と絶唱しているように、「柱への執着によって家や父親への執着を表現」（17）しているものとみてよかろう。

第二項　「寄りゐたまふ」柱

ところで、「柱」や「真木柱」の語に〈家ぼめ〉〈室ほぎ〉があるとしてこの歌にそれらの意図があったとする見解がある。

「真木の柱は」と詠む姫君は、御巫（みかんなぎ）および忌部の役割を担い、自身が去る邸において「大殿祭」の形式をなぞるごとく、「家ぼめ」「室ほぎ」を柱に向かって行っているのではないか。「真木柱」という語そのものが、柱に象徴される家への「称辞（たたごと）」であり、そこには「家ぼめ」「室ほぎ」という行為が凝縮されている。

堀淳一「家を祀る童女――真木柱姫君詠歌の意味（その二）」（18）

これによれば、真木柱の姫君は御巫や忌部の役割を担い、「大殿祭」の形式をなぞることで柱に向かって〈家ぼめ〉〈室ほぎ〉の行為が凝縮されているというのだ。

しかし、少なくともここに詠まれた歌に、それらを読みとろうとするのは不可能なのではなかろうか。

たとえば、『源氏物語索引』（19）によれば、『源氏物語』における「柱」の用語例は十四例、「真木柱」「真木の柱」の用語例は十例にのぼるが、このうち〈家ぼめ〉〈室ほぎ〉を詠んだと思われるものは皆無である。

それどころか、『源氏物語』の「柱」や「真木柱」の用例の多くにはきわめて特徴的な表現が共通してみられるのである。

その一例をあげてみよう。

出で入りたまひし方、寄りゐたまひし真木柱などを見たまふにも胸のみふたがりて……。

（『源氏物語』「須磨」の巻、一九〇頁）

〔現代語訳〕君のお出入りなさっていたあたりや、もたれてすわっていらっしゃった柱などをごらんになるにも、お胸がふさがるばかりで……。

須磨に退去した光源氏のことを都にとり残された紫の上がしのぶ場面である。紫の上は、源氏が出入りしていたあたりや常日頃もたれかかってすわっていた真木柱などを見ては、源氏が今ここにいないというまぎれもない事実を痛切に感じ取っているのである。

ここに詠まれた「真木柱」は、源氏が常日頃もたれかかっていた日常そのものを表象している。

しかも、そうした「柱」や「真木柱」に対する感覚は、この用例に限ったことではない。

『源氏物語』をみてみると、「柱」あるいは「真木柱」の用例には「寄りゐ」「寄りゐたまふ」「寄りかかる」といった表現がからみついている場合が少なくないのである。

それらを例挙してみよう。

中の柱に寄りゐて、脇息（けふそく）の上に経を置きて……。

（『源氏物語』「若紫」の巻、二〇六頁）

〔現代語訳〕（尼君が）中の柱に身を寄せてすわり、脇息の上に経巻を置いて……。

柱に寄りゐたまへる夕映えいとめでたし。

（『源氏物語』「薄雲」の巻、四五九頁）

〔現代語訳〕（光源氏が）柱にもたれてすわっていらっしゃるお姿が、夕暮の薄明りに映えているのは、まことにおみごとである。

御几帳引きやりたまへれば、母屋の柱に寄りかかりて、いときよげに、心恥づかしげなるさましてものしたまふ。

（『源氏物語』「若菜上」の巻、一二五頁）

〔現代語訳〕御几帳をお引きのけになると、（明石の）御方は母屋の柱に寄り添って、じっさいいかにも美しく、気のひけるほどのみごとなご様子をしていらっしゃる。

柱に寄りゐたまへるをも、若き人々はのぞきてめでたてまつる。

（『源氏物語』「椎本」の巻、二一二頁）

〔現代語訳〕（薫が）柱に寄りかかってすわっていらっしゃるお姿を、若い女房たちはのぞき見ておほめ申しあげている。

常よりも昔思ひ出でらるるに、えつつみあへで、寄りゐたまへる柱もとの簾の下より、やをらおよびて御袖をとらへつ。

（『源氏物語』「宿木」の巻、四二七頁）

〔現代語訳〕（薫）中納言はいつにもまして亡き姉君のことを思い出さずにはいられないので、もうこらえきれなくて、寄りかかっていらっしゃった柱のそばの御簾の下から、そっと身をのばして女君のお袖をとらえた。

寄りゐたまへりつる真木柱も褥も、なごり匂へる移り香、言へばいとことさらめきたるまでありがたし。

（『源氏物語』「東屋」の巻、五四－五五頁）

〔現代語訳〕（薫）大将が寄りかかっておいでになった真木柱にも褥にも、あとに残りただよう移り香が、いまさらそれを言うのもわざとらしいくらいに無類のかぐわしさである。

このように、『源氏物語』における「柱」あるいは「真木柱」の用例には「寄りゐ」「寄りゐたまふ」「寄りかかる」という表現とともに述べられていることが少なくなく、「柱」や「真木柱」が日常寄りかかり、もたれかかるものとして機能していることがわかるのである。すなわち、『源氏物語』における「柱」あるいは「真木柱」という用例には常日頃寄りかかり、もたれかかる日常的愛着の象徴的表現があると考えてよいのではなかろうか。

当該歌もこの流れのなかに位置しているように思われる。いま一度、『源氏物語』の本文をみてみよう。

常に寄りゐたまふ東面の柱を人に譲る心地したまふもあはれにて……。

（『源氏物語』「真木柱」の巻、三七三頁）

〔現代語訳〕姫君は、いつもご自分が寄りかかっていらっしゃる東面の柱を、これからは他人に譲ってしまうよう

な気がなさるのもせつなくて……。

今はとて宿離れぬとも馴れきつる真木の柱はわれを忘るな

（『源氏物語』「真木柱」の巻　三七三頁）

〔現代語訳〕今はとて……（今はかぎりと、このお邸を離れていってしまっても、これまでなれ親しんできたこの真木の柱は、私を忘れないでおくれ）

つまり、ご自分がいつも寄りかかっていらっしゃる東面の柱、それをこれからは他人に譲ってしまうことがせつなくて、そうした日常的な慣習が断たれ、それが別の人に取って代わられてしまうことへの言いようのない寂寥感がこの歌の背後にはあるといえよう。

そのように考えるならば、この「真木柱」もまた〈家ぼめ〉〈室ほぎ〉などではなく、日常的愛着の象徴的表現と理解してよかろう。少なくともここでは、姫君が生まれ育った家をあとにすることへの悲哀を日常的愛着を奪われることへの愛惜から歌を詠んでいるものとみてよいのではなかろうか。

第三項「刺し挟む」という行為

むしろ、この場面で着目しなければならないのは、真木柱の姫君が詠んだ歌をみずから柱の割れ目に「刺し挟む」としている行為そのものなのだ。

姫君、檜皮色の紙の重ね、ただいささかに書きて、柱の乾割れたるはさまに、笄の先して押し入れたまふ。

（『源氏物語』「真木柱」の巻　三七三頁）

〔現代語訳〕檜皮色の紙を重ねたのに、ほんの一筆書きつけて、柱のひび割れの隙間に笄の先でお差し入れになる。

ここで真木柱の姫君は、みずから詠んだ歌を紙に書きつけ、その紙を柱のひび割れの隙間に笄の先でもって差し挟んでいるのである。

歌を柱に書きつけるという行為は「手習」の巻（三五九頁）にもみられるが、ここではみずから詠んだ歌を柱の割れ目に「刺し挟む」というきわめて特異な行動に出ているのである。それは、ほかの「柱」「真木柱」の用例にはけっして見ることのできないこの場面独自の表現なのである。

では、いったいなぜ作者は真木柱の姫君に詠んだ歌を柱の割れ目に「刺し挟む」などという行為におよばせたのであろうか。

そう考えた時、やはり参考となるのは『古事記』の神話ではなかろうか。

じつは、この条りには次のような神話が踏まえられているように思われるのである。

大国主神が須勢理毘売を背に負って黄泉ひら坂を逃げ去り、一段落したのちの場面である。そこには次のような記述がみられる。

故、其の八上比売は、先の期の如くみとあたはしつ。故、其の八上比売は、率て来つれども、其の適妻須世理毘売を畏みて、其の生める子をば木の俣に刺し挟みて返りき。故、其の子を名づけて木俣神と云ふ。亦の名は、御井神と謂ふ。

（『古事記』上巻「大国主神」、八五頁）

〔現代語訳〕さて、あの八上比売は、先の約束のとおり大穴牟遅神と結婚なさった。それで、その八上比売を連れて来たけれども、正妻の須世理毘売をおそれて、自分の生んだ子を木の叉にさし挟んで帰った。それで、その子を名付けて木俣神という。またの名は御井神という。

ここに久かたぶりに「八上比売」が登場している。大穴牟遅神が八十神の従者として稲羽に出向いたのはもともと八十神たちが「八上比売」のもとへ求婚に出かけたからである。それゆえ、大穴牟遅神が須佐之男の住む「根の堅州国」を訪問することになったのもひとえに「八上比売」求婚譚の途上にすぎなかったといえよう。

これによれば、大穴牟遅神すなわち大国主神は須勢理毘売と結婚する以前にすでに八上比売と結ばれ、二人のあいだには子宝にも恵まれていたことがわかるのである。ところが、大国主神には須勢理毘売という「正妻」がいたために八上比売がそれにおそれをなして、みずから生んだ子どもを木の叉にさし挟んで本国へと帰ってしまったというのだ。

この神話を『源氏物語』に移し変えてみると次のようになるであろう。

大穴牟遅神すなわち大国主神をモデルとした鬚黒大将は、須勢理毘売をモデルとした玉鬘と結婚する以前にすでに八上比売ならぬ北の方とむすばれ、子宝にも恵まれていたのだという。ところが、北の方は鬚黒大将が若い玉鬘に夢中になっていたために夫に愛想がつき、子どもが詠んだ歌を柱の隙間に挿し挟むのを待って実家へと戻ってしまったということになるのである。

すなわち、両者は、いずれも離別の場面であることで共通し、いずれも夫の愛想づかしに業をにやした妻の方が怒って離別している点でも一致している。

『古事記』の神話では生んだわが子を「木の俣に刺し挟」むという異様な記述となっているのを、『源氏物語』では子どもがみずから詠んだ歌を「柱のひび割れの隙間に笄の先でお差し入れになる」という行動へと変化して表現されている。すなわち、八上比売が大穴牟遅神との間に生まれた子を木の叉にさし挟んだという乱暴ともいえる神話的表現が、鬚黒との間に生まれた子が別離の歌を柱のひび割れの隙間に笄の先でもって差し入れるという話へと文芸化されているということができよう。

いずれにしても、『古事記』の神話をもとに『源氏物語』の物語が生み出されたのである。

夫が若く高貴な身分の女性にうつつを抜かし、妻として長年夫に仕えてきた女性が追いやられるというさまは、『源氏物語』〈第二部〉を想わせるに充分である。ちょうど「北の方と玉鬘」の関係は、「紫の上と女三宮」の関係に似ているといえよう。若いうえに身分の高い女三宮が光源氏のもとに降嫁することによって、これまでだれよりも愛され特別あつかいを受けてきた紫の上は、「妻の座」をおびやかされ深い懊悩へとたたき落される結果となる。

そうした『源氏物語』〈第二部〉の根幹となるべき設定の〈原点〉にもやはり『古事記』の神話が踏まえられていたということができるのではなかろうか。

「真木柱」の巻に踏まえられている神話がすべてそうであるように、この神話もまた『日本書紀』には一切記されることがなく、『古事記』にしか伝えられていない。

ということは、〈玉鬘求婚譚〉の結末が『古事記』上巻の神話を〈源泉〉として創作されただけでなく、そもそも「真木柱」という巻名自体が『古事記』の神話に由来していたことがわかるのだ。

このように、「真木柱」という巻名の由来もまた『古事記』の神話にもとづいているのである。

注

（1）阿部秋生・秋山虔・今井源衛・鈴木日出男校注・訳『源氏物語』④〈新編日本古典文学全集〉、小学館、一九九六年。

（2）北山谿太『源氏物語辭典』平凡社、一九五七年、四七九頁。

（3）『國史大辭典』第九巻、吉川弘文館、一九八八年、一七三頁。

（4）『日本史大事典』第四巻、平凡社、一九九三年、五一二頁。

（5）『日本歴史大事典』二、小学館、二〇〇〇年、八六七－八六八頁。

（6）山口佳紀・神野志隆光校注・訳『古事記』〈新編日本古典文学全集〉、小学館、一九九七年、八五頁。

（7）『本居宣長全集』第九巻、神代八之巻根堅洲国の段、担当編集・大野晋、筑摩書房、一九六八年、四六一頁。

（8）植松安・大塚龍夫『古事記全釋』広文館書店、一九二五年、九〇頁。

（9）倉野憲司・武田祐吉校注『古事記　祝詞』〈日本古典文学大系〉、岩波書店、一九五八年、九〇頁。

（10）尾崎暢殃『古事記全講』加藤中道館、一九六六年、一三〇頁。

（11）荻原浅男・鴻巣隼雄校注・訳『古事記　上代歌謡』〈日本古典文学全集〉、小学館、一九七三年、九一頁。

（12）小島憲之・直木孝次郎・西宮一民・蔵中進・毛利正守校注・訳『日本書紀』①〈新編日本古典文学全集〉、小学館、一九九四年、九五頁。

（13）山口佳紀・神野志隆光校注・訳『古事記』〈新編日本古典文学全集〉、小学館、一九九七年、七四頁。

（14）伊井春樹編『花鳥餘情』〈源氏物語古注集成〉、桜楓社、一九七八年、一一頁。伊井春樹編『花鳥餘情』〈源氏物語古注集成〉巻一七、桜楓社、一九七八年、二〇八頁。

（15）『源氏物語注釈』六、風間書房、二〇〇六年、二九三頁。

（16）柳井滋・室伏信助・大朝雄二・鈴木日出男・藤井貞和・今西裕一郎校注『源氏物語』三〈新日本古典文学大系〉、岩波書店、一九九五年、一二七頁。

（17）阿部秋生・秋山虔・今井源衛校注・訳『源氏物語』三〈日本古典文学全集〉、小学館、一九七二年、三六五頁。

（18）堀淳一「家を祀る童女――真木柱姫君詠歌の意味（その二）」仁平道明編『真木柱』〈源氏物語の鑑賞と基礎知識〉、至文堂、二〇〇四年、一〇一頁。

（19）柳井滋・室伏信助・鈴木日出男・藤井貞和・今西祐一郎編『源氏物語索引』〈新日本古典文学大系〉別巻、岩波書店、一九九九年。

（二〇二一・一・二八受稿、二〇二一・三・九受理）

〔抄　録〕

源氏物語と古事記神話（五）

杉浦　一雄

『源氏物語』のいわゆる〈玉鬘十帖〉は、玉鬘を中心に六条院を舞台としてくりひろげられる〈玉鬘求婚譚〉を本旨としている。〈玉鬘十帖〉の掉尾をかざる「真木柱」の巻には、鬚黒大将が光源氏の目を盗んで玉鬘を自邸へと奪い去る〈六条院逃走の物語〉が描かれている。

これまでに私は、『源氏物語』の根底には〈記紀神話〉が深く関与し、『源氏物語』は〈記紀神話〉を源泉として執筆されたのではないかと考えてきた。もしもその発想に基づくならば、六条院を舞台とする〈玉鬘十帖〉の結末にも、その根底に〈記紀神話〉が踏まえられている可能性が高いのではないか。

そこで、ここでは『源氏物語』のなかから玉鬘と鬚黒大将とのかかわりを中心に取り上げ、鬚黒大将による〈六条院逃走の物語〉が、『古事記』における大国主神による〈根之堅州国逃走の神話〉を源泉として造型されたことを明らかにしてみたいと思う。

玉鬘をめぐる『源氏物語』と『古事記』との共通点について以下論述する。

⑩男主人公がどちらも天下を統治する立場にあった点。

⑪男主人公がどちらも短時日のうちに天下の統治から退いている点。

⑫巻名「真木柱」にちなみ、どちらも柱に「刺し挟む」ことで共通している点。

〈了〉